博物館ニュース
Museum News

徳島県立博物館
No.129
2022年12月1日発行

半田塗 八十物　（向かって左より飯椀、平椀、壷椀、木皿、汁椀、猪口）

幻の半田漆器

半田塗は、江戸から昭和にかけて、いまの徳島県美馬郡つるぎ町半田でつくられた漆器の総称です。八十物は八重椀とも言い、飯椀、汁椀、壷椀、平椀の、蓋と身のそろいをさしますが、ここでは木皿と猪口もつきます。木製の収納箱に墨書があり、文久元年（1861）の作とわかります。この資料により、半田における八十物の製作が、江戸時代末期にさかのぼることが確かめられました。

常設展示室の歴史・文化コレクション「半田　敷地屋本家大久保家の漆器」（会期：令和４年12月20日(火)～令和５年４月２日(日)）で展示します。

（美術工芸担当：大橋俊雄）

なぜ那賀町木頭地区だけに太布の製造技術が残ったのか

磯本宏紀

コウゾ、カジノキなどの樹皮（靱皮）の繊維を糸にし、織って布にしたものを太布と呼びます（図１）。太布は、古代以来使われてきたとされ、江戸時代に木綿が普及するまでは、普段着や労働着に使われた布の一つとされます。その製造技術は、現在では那賀町木頭地区だけに残る稀少なものです。では、なぜ木頭地区だけに残ったのでしょうか。

図１　太布（当館蔵）

文献に記されてきた太布

かつての人びとの太布に関する認識を知るため、文献をいくつか確認します。

19世紀初め、国学者本居宣長により編さんされた『玉勝間』によると、かつての「穀の木の皮」を材料に布を織る技術は、19世紀初めにはほとんどが失われていました。それが、阿波ではまだ伝えられていたことを知り、本居はそのことを、驚きをもって記しました。

民俗学者柳田國男による『木綿以前の事』という本があります。これには、柳田が20世紀初めに祖谷山を調査旅行した際の、夏冬を通して太布でつくられた衣類を着て暮らしているという聞き書きがあります。この当時、木頭地区以外に、祖谷山でも太布が使われていたことがわかります。

郷土史家後藤捷一は、「太布雑考」という調査報告を1956（昭和31）年に出しています。これには、祖谷山と木頭地区両方の技術や材料などが書かれています。この時点で後藤は、祖谷山では70歳以上の人でないと詳しいつくり方を知らない、と報告しています。祖谷山で消滅した理由は、他の布に比べ手間がかかる、美しくなく荒っぽいからとされ、明治中頃から末期にかけて、廃れていったのだとされます。

太布と木綿の交換と行商

では、なぜ木頭地区で太布の製造技術が残ったのでしょうか。民俗学者竹内淳子による「木の布・草の布」に掲載された聞き書きの要点を紹介します。

榊野アサ氏（那賀町木頭南宇）という明治20年代生まれの人物の、若い頃の話です。榊野氏は、子守奉公で貯めたお金を元手に新野（阿南市）の呉服屋で縞木綿の反物を仕入れ、徒歩で木頭地区まで運び、反物を切り売りしました。木綿を売ったお金で今度は太布を買い集め、新野まで運んで卸しました。卸された太布は、呉服屋が弁当袋や畳の縁布に加工して徳島方面に売りました。

明治後期、木綿一反の仕入れ価格よりも太布の買い取り価格の方が高かったようで、荷物を背負って木頭地区と新野を行き来し、行商することで、その差額分を稼ぐことができました。20世紀初め以来、自家用の衣類としての太布から、換金もできる太布になることで、木頭地区での製造が続くことになりました。

その後、文化財「阿波の太布紡織習俗」としての記録作成措置がとられたのは1962（昭和37）年、岡田ヲチヨ氏（那賀町木頭南宇）が「阿波太布製作技法」の保持者となったのは1970年のことでした。

現在、太布製造に関しては、２種類の文化財指定があります。重要無形民俗文化財「阿波の太布製造技術」（2017年３月指定）と、徳島県指定無形文化財（工芸技術）「阿波太布製造技法」（1984年８月指定）です。いずれも、阿波太布製造技法保存伝承会が保持団体です（図２）。

太布関係資料と榊野アサ氏

2022（令和４）年３月15日から７月18日まで、当館常設展の歴史・文化コレクションで「太布―樹皮から布をつくる手仕事―」を開催しました。先述の榊野アサ氏が製作、使用したものも多数紹介しました。着物、作業着など衣類だけではなく、太布でつくった穀物用の袋、弁当袋、畳の縁布などの製品もありました。また、太布の糸を入れる「おごけ（桶）」や地機（じばた）など、太布の製造用具も展示しました（図３）。

これらの資料群は、榊野アサ氏が使わなくなった後、当館に寄贈されたものです。現在は博物館で榊野アサ氏の“モノ語り”を引き継（つ）いでいます。

（民俗担当）

引用文献

後藤捷一　1956　「太布雑考」『近畿民俗』19

竹内淳子　2011［1982］「木の布・草の布」　田村善次郎・宮本千晴監修『あるくみるきく双書　宮本常一とあるいた昭和の日本　21織物と染物』　農山漁村文化協会

本居宣長　1968　『玉勝間』下　岩波書店

柳田國男　1990　『柳田國男全集』17　筑摩書房

図２　阿波太布製造技法保存伝承会によるカジ蒸（む）しの作業

図３　榊野アサ氏による太布製品と製造用具（「太布―樹皮から布をつくる手仕事―」展より）

半田 敷地屋本家大久保家の漆器

現在の徳島県美馬郡つるぎ町半田では、江戸時代から昭和40年代にかけて、半田塗という庶民向けの漆器がつくられました。敷地屋本家大久保家は、江戸時代には徳島藩の保護のもと、明治から大正期にかけては独力で、半田塗では唯一の漆器問屋を経営しました。当館は令和４年６月に、子孫の方より漆器類約1,300点の寄贈を受けました。それらは同家で使われた食膳具を中心とし、商品である半田漆器をふくみます。

寄贈資料により、阿波においてながく漆器生産をになっていた家が、みずからどのような製品をそろえたのか、また半田塗とはどのような塗物なのかを知ることができます。それらの一部を展示し、敷地屋本家大久保家および半田塗について紹介します。

〔会　期〕

令和４年12月20日(火)～
令和５年４月２日(日)

〔開館時間〕

9：30 ～ 17：00

〔会　場〕

博物館２階　常設展示室内
歴史・文化コレクション

〔休館日〕

月曜日（ただし令和５年１月９日(月･祝)は開館、翌10日(火)は休館）
年末年始（12月29日～１月４日）

〔観覧料〕

常設展観覧料（一般400円、高校生・大学生200円、小学生・中学生100円）
※祝日・振替休日は観覧料無料
※各種減免あり

外青漆内本朱吸物膳　文政２年（1819）作

惣朱兜附菓子椀　安政５～６年（1858～59）作

学芸員による展示解説

■ 12月25日(日)　13:30～14:00
■ ２月11日(土･祝)　15:00～15:30
■ ３月26日(日)　13:30～14:00

会場：博物館2階　常設展示室内
歴史・文化コレクション

外青光内本朱本高菊蝶絵組肴盆　産地不明
嘉永元年（1848）作

情報BOX

銅鐸と鳥居龍蔵
―二つの博物館をつなぐ―

鳥居龍蔵
（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵）

文化の森には、二つの「博物館」があります。一つはいうまでもなく当館で、もう一つは鳥居龍蔵記念博物館です。両館の常設展示室は隣接しているものの、あわせてご覧になる機会はあまりないと思います。そこで、銅鐸をキーワードとして、二つの博物館をつなぐ話題を紹介しましょう。

当館常設展のうち「先史・古代の徳島」には、ズラリと銅鐸が並ぶ展示ケースがあります。銅鐸はベル形の青銅器で、弥生時代において、農耕に関するまつりに用いられたといわれています。徳島県で出土した銅鐸は、現存しないものも含めると約50点が知られており、全国でもトップクラスの数量です。

ところで、かつて銅鐸の起源について、中国西南部に住む苗（ミャオ）族などの「インドシナ民族」が日本列島に渡来して用いたものと考え、これらの人びとを日本人の源流の一部とする説がありました。それを唱えたのは、徳島が生んだ人類学・考古学等の先覚者である鳥居龍蔵（1870-1953）でした。今では、そのような考えは否定されているものの、独創性に満ちたものであったことは事実です。

鳥居は、1902（明治35）～03年、中国へ行き、貴州省、雲南省、四川省などを巡って苗族をはじめとする少数民族の体格や生活文化について、幅広く調査しました。その際、彼らの衣服などや銅鼓という青銅製の打楽器、日本で出土する銅鐸には、文様の類似があるとして注目し、さらには日本人の起源に結びつけていったのです。

銅鐸と鳥居龍蔵―その関係を知ると、鳥居とは、いったいどんな人物だったのか、気になりませんか？その答えがあるのは、もちろん鳥居龍蔵記念博物館の常設展です。今度、文化の森を訪れるときには、ぜひ二つの博物館をあわせてご覧ください。

（歴史担当：長谷川賢二）

図１　当館の常設展（「先史・古代の徳島」における銅鐸の展示）

図２　鳥居龍蔵記念博物館の常設展（第１展示室）

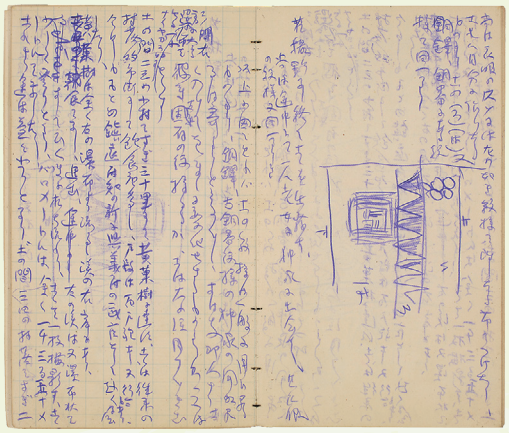
図３　鳥居の中国西南部調査フィールドノート
（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館蔵）
銅鐸と少数民族の銅器（銅鼓のこと）や布の文様の類似に注目した部分。

野外博物館

勝浦町の恐竜化石発掘現場

徳島県立博物館は、2018年４月の勝浦町の恐竜化石含有層の発見を機に、継続的に恐竜などの脊椎動物化石の発掘調査を実施しています。勝浦町の発掘現場は、現在、化石の盗掘や事故防止の観点から非公開にしており、関係者以外立ち入ることはできません。そのため、現在の発掘現場の状況について、ここで紹介したいと思います。

勝浦町の発掘現場は、急峻な山の斜面にあります（図１）。この斜面には、物部川層群立川層とよばれる約１億3000万年前（白亜紀前期）の地層が露出しています。地層は、60°～70°の高角度で傾斜しており、礫岩や砂岩、泥岩といった岩石で構成されています。立川層の中で化石を多く含む部分は、おもに泥岩や泥質砂岩です。この部分に含まれる化石の多くは、シダ植物や裸子植物などの植物化石ですが、その一部に淡水生貝類（イシガイ類やタニシ類など）の化石を多く含む層があります。淡水生貝類化石にまじって、恐竜やワニ、カメといった脊椎動物化石が含まれることから、この層を恐竜化石含有層とよび、発掘を進めています。

2018～2019年度までは、斜面の中腹に露出した恐竜化石含有層を掘削していましたが、落石の危険もあるため、2020年度からは、重機を使い、斜面上部から地層を掘削して発掘を進めています。発掘現場には、トラックなどの車両が往来できる道をつけることが難しいため、化石を含む岩石を索道という簡易ロープウェーで運搬しています（図２）。

2021年度の発掘調査では、斜面上部において恐竜化石含有層を広く露出させることができ、安全かつ効率的に発掘ができるようになりました（図３）。その結果、2021年度は、230点を超える脊椎動物化石を発見することができました。その中には、イグアノドン類の尾椎（尻尾の骨）や歯などの恐竜化石も含まれていました（図４）。イグアノドン類の尾椎は、保存状態が良く、ほぼ完全な形を残しています。今後の発掘調査次第では、イグアノドン類の尾椎の“持ち主”の別の骨が発見される可能性も十分にありますので、今後の発掘に期待が膨らみます。

（地学担当：辻野泰之）

図１　勝浦町の恐竜化石発掘現場の様子
（2021年12月6日撮影）

図３　恐竜化石含有層を露出させ、発掘している様子
（2021年12月14日撮影）

図２　索道を使った岩石の運搬作業
（2021年10月26日撮影）

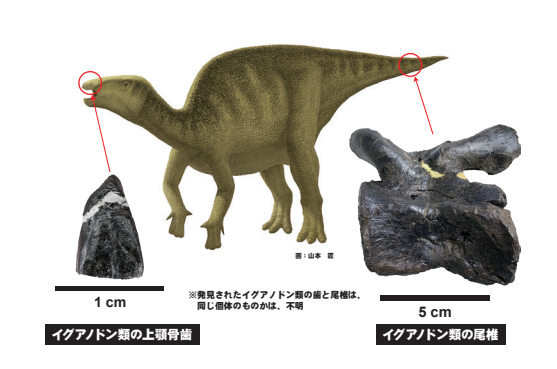

図４　2021年度の発掘調査で発見されたイグアノドン類の歯と尾椎。
尾椎の大きさから、全長は6～7mと推定される。

レファレンスQ and A

シロマダラというヘビについて教えてください

シロマダラは、インターネットなどで、「幻（まぼろし）のヘビ」と紹介されることもあってか、毎年、「シロマダラを見つけたのだが、珍しいのだろうか」あるいは「シロマダラとはどのようなヘビなのか」といったご質問を何件かいただきます。そこで今回は、シロマダラについて簡単に紹介します。

シロマダラは、全長30～70 cmほどで、体に黒と白のバンド模様が入るヘビです（図１）。このヘビはトカゲや他のヘビの仲間などの爬虫類（はちゅうるい）を食べます。よく目立つ模様をもつからか、初めてこのヘビを見た方は毒ヘビと思われることもあるようですが、無毒のヘビです。徳島県では、県南部から北部、西部まで広い範囲で生息が確認されています。また、離島の出羽島（でばじま）にも生息しています。夜間に動き回り、あまり人目につかないことから、捕獲されると新聞などで話題になることがありますが、徳島県ではあまり珍しいとは言えません。

シロマダラについてお問合せをいただく際に、徳島県に生息するヘビの中で毒をもつのはどのような種類かというご質問もいただくことがありますので、ここで合わせて紹介します。徳島県には、シロマダラ以外に、タカチホヘビ、シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシ、ニホンマムシが生息しています。この中で毒をもつのは、ヤマカガシとニホンマムシのみです。

ヘビというと、気持ち悪い・怖いというイメージがある方が多いようです。ヤマカガシやニホンマムシは毒があり、咬まれると大変危険ですが、それ以外のヘビは、咬まれても痛いくらいで、大きな危険はありません（積極的に触るなどしなければ咬んでくることもありません）。タカチホヘビやヒバカリでは、咬まれたとしてもあまり痛くありません。もし、野外でシロマダラやその他の無毒のヘビを見かけることがあれば、そっと見守ってあげてください。当館の常設展で徳島県に生息するすべてのヘビ類を展示していますので（図２）、興味を持たれた方はぜひご来館ください。

（動物担当：井藤大樹）

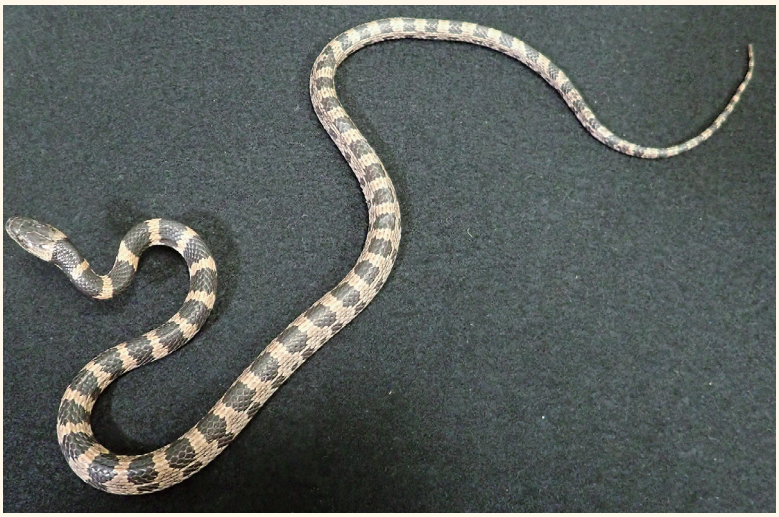

図１　牟岐町出羽島（むぎちょうでばじま）で捕獲されたシロマダラ

図２　常設展示室内でヘビ類を紹介しているコーナー

１月から３月までの博物館普及行事　あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	申込	対象（定員）	備考
野外自然かんさつⅡ＜植物＞	初めての植物かんさつ（新春編）	1月29日（日）	13:30～15:30	要	小学生から一般（15）	同日開催「ゼロから始める植物学」
	中級クラス植物観察会２月	2月12日（日）	10:00～17:00	要	小学生から一般（10）	乳幼児連れでの参加可能。弁当・水筒持参
	初めての植物かんさつ（早春編）	3月26日（日）	13:30～15:30	要	小学生から一般（15）	同日開催「ゼロから始める植物学」
たのしい地学体験教室	貝化石標本をつくろう	2月26日（日）	13:00～15:00	要	小学生から一般（20）	小学4年から一般（小学生は保護者同伴）
	恐竜化石をさがそう！３月	3月19日（日）	13:30～15:30	要	小学生から一般（15）	恐竜やカメなどの脊椎動物化石が発見された場合は博物館へ寄贈になります。
ミュージアムトーク	ゼロから始める植物学～標本整理編～	1月29日（日）	10:30～12:00	要	小学生から一般（20）	小学生は保護者同伴 同日開催「初めての植物かんさつ（新春編）」
	天保飢饉と徳島藩	1月29日（日）	13:30～15:00	要	小学生から一般（20）	小学生から一般（小学生は保護者同伴）
	ゼロから始める植物学～植物分類学入門～	3月26日（日）	10:30～12:00	要	小学生から一般（20）	小学生は保護者同伴 同日開催「初めての植物かんさつ（早春編）」
コレクションセクション関連行事	歴史・文化コレクション「半田　敷地屋本家大久保家の漆器」展示解説	①2月11日（土・祝）②3月26日（日）	①15:00～15:30 ②13:30～14:00	不要	小学生から一般（20）	2月11日（土・祝）は無料 3月26日（日）は常設展観覧料が必要

普及行事のお申し込みについて

開催予定日の**１か月前から10日前必着**でお申し込みください。
参加希望者が定員を超過する場合は抽選とし、結果は全員にお知らせします。また、行事の詳細は、当選者にご案内します。
原則として、参加費は無料ですが、材料費をいただくことがあります。

●往復はがきでのお申し込み

１枚の往復はがきで、１行事のみ申し込むことができます。
下図のように記入し、お申し込みください。

往復はがきの記入例

＜往信の表面＞	＜返信の裏面＞	＜返信の表面＞	＜往信の裏面＞
63 〒770-8070 往信 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館	何も書かないでください	63 〒□□□-□□□□ 返信 あなたの郵便番号 住所 氏名	1. 参加希望の行事名 2. 参加希望者全員の氏名（学年・年齢） 3. 住所 4. 電話番号（またはFAX番号）

●電子メールでのお申し込み

１通の電子メールで、１行事のみ申し込むことができます（申し込み締切日の17時まで）。
確実に連絡がとれるよう、携帯電話をご使用の場合は、パソコンからの電子メールを受信できるよう設定してください。
お申し込みのメールには、必ず次の項目を記入してください。
①参加希望の行事名　②参加希望者全員の氏名（学年・年齢）
③住所　④日中に連絡のとれる携帯電話番号（または固定電話番号、FAX番号）
⑤メールアドレス

※いただいた個人情報は、お申し込みのあった行事についてのみ使用します。
行事申込専用アドレス　mus_event@bunmori.tokushima.jp
詳しくは、徳島県立博物館のホームページをご確認ください。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定を変更する場合があります。詳しくは、徳島県立博物館のホームページをご覧いただくか、お電話でご確認ください。

学校教育に博物館を！

徳島県立博物館のもつ資源（もの・情報・人）を、学校教育の場で有効に活用していただきたいと考えています。

- 遠足
- 館内授業（博物館で）
- 出前授業（学校で）
- 博物館資料の貸し出し
- 教材研究のお手伝い

・学習内容に関する質問や実験・観察の方法など、何でもお気軽におたずねください。動物、植物、地学、考古、歴史、民俗、美術工芸の各専門分野の学芸員がご相談に応じます。お気軽にお電話ください。

火おこし（出前授業・館内授業）

特典がいっぱい！！徳島県立博物館友の会

博物館友の会は、年間を通してさまざまな体験活動を行い、自然や歴史・文化について、楽しく学んでいます。
個人でも、ご家族でも、ご入会いただけます。みなさんも参加してみませんか。

■年会費
・個人会員2,000円
・家族会員3,000円
（10月以降にご入会の場合、会費はそれぞれ半額となります。）

■会員の特典
・友の会行事に参加できます。
・友の会の出版物やミュージアムショップの商品を、１割引で購入することができます。
・催し物案内や博物館ニュース、会報などが、毎月お手元に届きます。

化石をさがそう！

詳しくは、友の会事務局まで（電話088-668-3636）

上記お問い合わせは、徳島県立博物館まで（電話 088-668-3636　FAX 088-668-7197）

■発行年月日　2022年12月1日
■編集・発行　徳島県立博物館　〒770-8070　徳島市八万町向寺山
https://museum.bunmori.tokushima.jp　TEL088-668-3636　FAX088-668-7197